

## 論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	感覚統合科学領域耳鼻咽喉・頭頸部外科学教育研究分野 氏名 清水目奈美		
指導教授氏名	松原 篤		
論文審査担当者	主 査 小林 恒	副 査 井原 一成	副 査 中村 和彦
(論文題目) 一般地域住民を対象とした味覚閾値の検討 -2019年度岩木健康増進プロジェクトの結果から-			
(論文審査の要旨) 本研究では大規模健診において味覚検査を行い、年齢層別の味覚閾値、性差、血清亜鉛値と味覚閾値との関連、ならびに高血圧や糖尿病、喫煙との関連について検討した。 【対象と方法】2019年度の岩木プロジェクト健診に参加した1027名を解析対象とした。味覚検査としては、甘味、酸味、塩味、苦味について全口腔法で行った。味覚閾値は濃度を5段階にスコア化し、上昇法で調査を行った。被検者が最高濃度でも味を判定できない場合はスコア6とした。また、味覚障害の自覚はアンケートで聴取した。四味質の平均スコアと味質別のスコアを年齢層別、男女別に比較した。統計学的手法は Kruskal-Wallis 検定による多重比較と Mann-Whitney の U 検定を用いて解析した。 【結果】年齢層別の四味質閾値の平均スコアは高齢者ほど上昇していた。また味質別では酸味と塩味で高齢者の味覚閾値が有意に上昇していた。全味質で高齢者ほど認知閾値と検知閾値との間の乖離が大きかった。また男女別では全ての味質において女性の味覚閾値が有意に低かった。高血圧、血糖値、血清亜鉛値と味覚閾値の有意な関連は認めず、喫煙との関連では苦味で有意に喫煙者の味覚閾値が高かった。 【考察】味覚の受容体は、G 蛋白共役型受容体とイオンチャネル型受容体に大別される。高齢者ではイオンチャネル型受容体により知覚される感覚である酸味と塩味の味覚閾値が若年者より有意に上昇していた。このことは受容体の構造と老化の関連を考える上で興味深いものと思われる。味覚障害の主な病態としては亜鉛欠乏による受容器障害が挙げられるが、血清亜鉛値が正常でその他の原因が特定されない特発性味覚障害も少なくない。今回、健常群と亜鉛低下群で味覚閾値を比較検討したが、有意差を認めなかった。 大規模疫学調査において味覚検査を行った結果、加齢により味覚閾値が有意に上昇し、さらに高齢者には自覚のない潜在的な亜鉛欠乏性味覚障害が多いことを明らかとし、本研究は学位授与に値する。			
公表雑誌等名	日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会会誌 125:1375-1383, 2022		